

日本語の展開

松村明

中央公論社

日本語の世界
2



日本語の世界 2

日本語の展開

定価一八〇〇円

昭和六十一年三月十日印刷
昭和六十一年三月二十日発行

著者 松村 明

発行者 嶋中 鵬二

印刷者 山元 悟

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目八十七

振替東京二二三四

©一九八六 検印廃止

ISBN4-12-401722-7

日本語の展開

目次

はじめに

第一章 言文二途へ——話しことばと書きことば——

中世の国語 話しことばと書きことば 話しことばによる言語生活 読み書きの言語生活 方言の進出と中央語 連濁 連声 唐言語

第二章 上方語と江戸語

江戸時代の国語 上方語の例 江戸語の成立 江戸語の資料 戯作物に現われた江戸語 江戸語における上方語要素 江戸語の諸相 江戸詞と本江戸方言書に見られる上方語 方言書に見られる江戸語 江戸語の共通語化

第三章 近世の音韻と音韻現象

『天草本伊曽呂休物語』とそのローマ字綴り キリシタン版に見られる日本語 オ列長音の開合の区別と四つ仮名 本江戸と江戸訛り 『和英語林集成』の江戸語観 江戸語の発音上の特徴 「タウ」「カ」の混同 江戸訛りと東京語

第四章 動詞、活用の変り

二段活用的一段化 九種類の活用から五種類へ 動詞活用の基本的性格 下二段活用の出現 ラ行変格活用の消滅 混合活用における終止形と連体形 室町末期までの二段活用的一段化 江戸時代における一段化 サ行変格の一段化 カ行変格の一段化 動詞の活用の変遷 下二段から下一段・四段になっ

た動詞 ラ行四段特別活用 動詞「蹴る」の場合 四段から上二段になった
動詞 動詞「恨む」の場合

第五章 条件表現の移り変り

既定と仮定 『遠鏡』の口語訳(1)順接 『遠鏡』の口語訳(2)逆接 口語訳は京こ
とは 江戸語の未然形 仮定形の成立 形容詞・形容動詞の未然形 形容
詞・形容動詞の仮定形 現代の「から」と「ので」 明治期の「から」と「の
で」 近世の「から」と「ので」 「さかい」と「から」 「さかいで」「さかい
に」 「ほどに」 「によって」 「ゆえ」「ゆえに」

第六章 女房詞と女性語

位相による言語の違い 女性語の語例(江戸語) 『日葡辞書』の婦人語 女
房詞 『大上臈御名之事』の女房詞 女房詞の作られ方 女房詞の普及 女
『女重宝記』の女ことばづかい 『女重宝記』の大和詞 「ひもじ」から「ひも
じい」へ 一般語化した女性語 廓ことば 遊里関係の用語 「ん」入り
の文末語 「さます」「なます」 吉原言葉 さんす言葉・ざあます言葉
幼児語

第七章 漢語と外来語

湯桶読み 湯桶読みと重箱読み 『浮世風呂』(男湯)に見られる漢語 『浮
世風呂』(女湯)に見られる漢語 『折たく柴の記』の漢語 外来語について
ポルトガル語からの外来語 スペイン語からの外来語 オランダ語からの外来

語 英語からの外来語 フランス語からの外来語 ロシア語からの外来語
ドイツ語からの外来語 イタリア語その他の外来語 外来語の片仮名表記
キリタン版での外来語表記 『破提字子』その他の外来語表記 『西洋紀聞』
の片仮名表記 『西洋紀聞』の外来語 片仮名表記の特徴 『西洋紀聞』の諸
写本での外来語表記

第八章 明治以降の日本語

東京語にもとづく共通語の確立 言文一致の運動 西欧語からの影響 音韻
と文字・表記法 外来語と新しい漢語 「的」とその造語力 漢語の進出
語法上の諸問題 言文一致体と西欧語的表現

おわりに

参考文献

336

索引

342

日本語の展開

はじめに

日本語の歴史を通観してみると、鎌倉室町時代を転換期として、それ以前とそれ以後と、大きく二つの時代に分けられる。前者すなわち古代から鎌倉室町時代に至るもの、これが古代日本語の世界であり、後者すなわち鎌倉室町時代から江戸時代を経て現代に至るもの、これが近代日本語の世界である。

古代日本語にくらべて、近代日本語の世界には、いろいろ新しい面が見られる。その第一のものは、日本語が言文二途に分かれていったことである。言とはすなわち話しことば、文とはすなわち書きことばで、日本語が話しことばと書きことばという二つの言語体系に分かれていくことを指すのである。そして、話しことばと書きことばとは、相互に影響し合いつつ、それぞれ独自の変化・発展を遂げていく。特に、話しことばの発展はいちじるしいものがあり、近代日本語の世界は、話しことばの変遷を中心として、いろいろの面が多様に変化・発展していくことになる。話しことばというものは、そのことばが話される土地と密接に関連している。そこに言語の地域性が直接にかかわってくるのである。古代日本語をささえたものは、京都を中心とする貴族階

級の人々であった。したがって、そのことばは、京都のことばが中心となっていた。ところが、鎌倉時代以降、東国をおもな地盤として、武士階級が台頭し、政治上の実権をにぎるようになる。室町時代になると、さらに、東国出身の武士たちが京都に幕府を開いて、天下に君臨するようになる。したがって、この時代には、東国語の影響が京都のことばにも直接に及ぶようになる。古代語の時代には、東国という、都からははるかに隔たった、一地方のことばでしかなかった東国語も、ようやく、その存在を明らかにしてくるようになるのである。

室町時代の末期、いわゆる織豊時代を経て、江戸時代になると、社会情勢は、さらに新たな様相を見せることになり、ことばの面でも、それ以前の時代とはまた異なった、新しい展開を見せるようになる。それは、それまで日本語の中心的存在であった京都およびその周辺のことばについての問題である。商業都市大坂の発展は、大坂の地を中心に町人文化の花を開かせ、それとともに、大坂のことばが京都のことばと並んで、大きな存在となってくる。京都のことばと大坂のことばとを合せて、京坂語あるいは上方語とよぶが、この上方語が日本語の中心的存在となっていくのである。

ところで、江戸時代は、政権を取るに至った徳川氏が江戸に幕府を開き、政治的中心が京都から東国の一都市江戸へと移っていった。そして、この時代には、時の経過とともに、江戸にも新たな文化が次第に栄えてゆく。それとともに、東国語に基盤をもつ江戸のことばも次第に独自のことばとして形成されてくる。かくて、江戸時代も半ばを過ぎるころになると、江戸語は、上方

語と並んで、日本語の中心的な言語としての資格を次第に得てくるようになる。こうして、江戸時代には、上方語と江戸語という、二つの大きな言語圏が形成され、ともに全国に通用し得る、いわば、二つの共通語が出来上っていったのである。

しかし、明治維新を迎え、再び時代は大きく転回し、首都も東京に移されて、明治の新しい時代となる。江戸語の後身である東京語をもとにしての共通語が全国にひろく通用するようになるが、ここに至って、日本語の歴史の上で、東国語に基盤をもつことばが始めて共通語として脚光を浴びることになるわけである。本巻においては、話しことばに重点を置きつつ、日本語の中心が西から東へと、漸次移っていくという、近代日本語の展開の諸相を、いくつかの問題を中心にして、少し具体的にたどってみることにする。

第一章 言文二途へ——話しことばと書きことば——

中世の国語

国語史の上で、中世の国語とは、鎌倉時代および室町時代の国語をいう。中世においては、平安時代以来、京都のことばが標準的な言語として全国に君臨していることは同様であるが、鎌倉時代になると、京都のことばにも、おいおい東国方言などの影響が見られるようになってきた。特に、室町時代に足利氏が京都に幕府を立てるに及んで、京都のことば自体に直接に関東方言の影響を受けることがさらに多くなった。また、諸方言間の差異も、この時代にはさらに大きくなっていったが、諸方言の中でも、特に東国方言には多くの特異点が見られるようになった。書きことばが話しことばから次第に離れていき、言文二途に分かれる傾向が強く見られるようになる。特に室町時代になると、書きことばと話しことばとの間には、いちじるしい差異が見られるようになり、完全に言文二途の時代にはいった。書きことばには『平家物語』その他の軍記物の文章に見られるように、新しい種類の文体も作られるようになる

が、他方、話しことばを文字の上にするした口語文献も、室町時代にはいろいろ見られるようになる。いったいに、今日のわれわれの日常生活に関すること、室町時代あたりにその起源の見いだされるものが多いのであるが、今日のいわゆる口語の源流も、だいたいにおいて、室町時代に見いだされるものが多いのである。

話(コトバ)と書(カキ)と

ロドリゲス (João Rodriguez, 1561~1634) の『日本大文典』(Arte da lingua de Iapam. Nangasagui, 1604~1608. [原書名は『日本文典』であるが、土井忠生訳では書名を『日本大文典』とする。本書での引用も土井博士訳によるので、書名もそれにした(う))のはじめに、「本文典の論述を理解し易からしめんが為の例言数則」があるが、そこで、日本語には話しことばと書きことばとが別の体系をなして存在していることを述べている。

日本語は、「こゑ」の混じらない本来の純粹な「よみ」であるか、「よみ」に少しく「こゑ」の混じたもので、すべての人に通用するものであるか、「こゑ」の多量に混じたもので、やや莊重であり、日本人が普通には文書に用ゐる、重々しい身分の者とか學者とかが談話に用ゐるところのものであるか、純粹の「こゑ」のみのもので、最も晦渋であり、坊主が仏典の上で使ふところのものであるか、そのいづれかである。

日本人もまた話す時の通俗な文体を用ゐて物を書くといふ事は決してしない。話しことばや日常の会話に於ける文体と文書や書物や書状の文体とは全く別であつて、言ひ廻しなり、動詞の語尾なり、その中に用ゐられる助辞なりがたがひに甚だしく相違してゐる。(中略)随

つて又、この国語は、その中に話しことばと書きことばとのほぼ二種類のものが含まれてゐる事になる。

ここで、「こゑ」(ロドリゲスは、'Cove' というように、ローマ字で表記している) といっているのは、漢字音のことで、漢語がこれであり、「よみ」(ロドリゲスは、'Yomi' というように、ローマ字で表記している) といっているのは訓のことで、和語がこれにあたる。前段のところでは、日本語に、次のような部類のものを分けている。

- (1) 「こゑ」の混じない、本来の純粹な「よみ」——すべての人に通用する。
- (2) 「よみ」に少しく「こゑ」の混じったもの——すべての人に通用する。
- (3) 「こゑ」の多量に混じったもの——やや莊重。

(4) 普通には文書に用いる。(ロ) 重々しい身分の者や学者が談話に用いる。

(イ) 純粹の「こゑ」のみのもの——最も晦渋。坊主が仏典の上で使う。

これは、和語と漢語、訓読みの語と音読みの語の面から日本語の類別をし、それぞれの使用者層の区分をしているのである。そして、後段において、「日本人もまた話す時の通俗な文体を用ゐて物を書くといふ事は決してしない」として、話しことばと書きことばとが、それぞれ別体系の言語として行われていることを述べている。このように、話しことばと書きことばとが、それぞれ別体系の言語としてはっきり分かれてくるようになったために、この時代の言語生活は、前代に比して、さらに複雑な様相をもつことになったわけである。男子に限っても、公家・僧侶・武

家・庶民と、それぞれの階層で用いられる言語の上にもかなりの差異があり、女子はまた独特の言語をもつことになった。ロドリゲスは、「こゑ」と「よみ」の混合の面から四つの部類の言語に分けている。これは、ごく大ざっぱな部類分けであり、実際には、もっと複雑な様相をもっているが、ロドリゲスの部類分けでも、だいたいの見当はつけられるであろう。

話しことばによる言語生活

話しことばの言語生活の上では、この時代のものであるとして、特に武家のそれが注意される。封建制度の下における武士の生活にあつては、話すこと・聞くことについても、いろいろ制約があり、それだけに話しことばのしつけということが、かなり厳重に行われることになったのであろう。このようなことは、主として家庭において、親など身内の者から直接しつけられることが多かったようである。たとえば、『伊勢貞親教訓』の中にも、次のように、話すこと・聞くことについての心得が、特に書きしるされている。

一、主と雑談するにも、相構相構召仕者と常に雑談すまじき也。打くつろぎて、必無礼に成也。心安所存出来て、主をあなどる也。隔心せん人と常に寄合て、天下の沙汰諸事に付て雑談を聞て、後学にすべき也。人は生まれつき物を知事はなし。人のいふ事を聞、ひとのたたずまいを見て智恵は付もの也。耳にきく事を第一の得益とす。法文にも此^{この}道の根^ねに根^ねる耳根^{みみね}にいへり。賤ものと雑談しつれば、あしき道にひかれて、耳ならふ事もよき事はなし。それよ、習もの人中にて、詞を出すに劣なる事ある也。

このような細かな心得が文献に残されているのは、前代までにはなかったことで、やはりこうい

うところに、封建制度下の武家の言語生活の一端が見られるわけであろう。もっとも、このような話しことばのしつけに関するものは女子の場合にも見られる。たとえば、阿仏尼作の『乳母の文』(一名、『庭のをしへ』)にも、次のようなことが出ている。

たとへ人のいみじうつらき御事候とも、色に出て人に見えんは、はづかしかりぬべきこととおぼしめして、さらぬ顔にてはありながら、さすがにうやとは覚えて、ことずくななるやうに、御もてなし候へ。また嬉しう御心にあふ事候とも、こと葉に、うれしや、ありがたやなど、おほせごとあるまじく候。(中略)

たとえば、人の上をそしり、にくみなどしても、忍ぶ事をいひあらはし、うちさざめきなど、かたへの人の候はんに、露ばかりこと葉まぜさせおはしまし候まじく候。あやまりて、人はなにとかまうしつる、いかがなど尋ねまいらすること候とも、いさなにとやらん、あらぬことをいひしほに、きかずなりにけりなど、はかなげに仰せられなして、ことざまなる御あひしらひ候べく候。

ここでは、不用意な発言をつつしむべきことがしるされているが、『乳母の文』よりすこし後のものである『めのとのさうし』にも、次のような記述が見られる。

御むすめそだて候こと、十ばかりにもなり候はば、奥ふかく、人にみせられ候まじ。心もちうらやかにこゑひきく、御そだて候へ。あらるままにくるはせ、ものいひしどけなく、はしぢかにうちふしなどさせらるまじく候。そうじて人すくなき道ありく事、又大勢うちま

じり候おりなど御心をそへて、御みはなつまじく候。かやうの事、母親の心もちに有事なり。

(中略)

おん湯どのとまうす事はなくてかなはぬ御事にて候。あひかまへて、ゆやふろにて御物語あるまじく候。めしつかふ人にも、こゑ高くさせられ候まじく候。見ぐるしく、ききぐるしきものにて候。はだかよりあひに、たか声して人にのぞかれまほしげなる、かろがろしく候。そうじてたかくものいはぬことにて候。うつせみの御かたがへの夜、人げすくなきは、おそろしきものとの給ひしをこそ、光源氏はたちききて、さては人なしと心えて、忍びいらせ給ひ候へ。是もかろきかたにこそつたへ候へ。

前段は、女子を育てる上で注意すべきことばのしつけを述べたものであり、後段は、湯殿という特殊な場所のことばの注意を述べたものである。

女子の場合のこのような話しことばのしつけに関することは、内容的には、前代と特に異なる点はないと思われる。ただ、とにかく、このように、文献に残っているのは、もちろん時代が新しいということもあるであろうが、また、ことばのしつけについての関心が、前代よりもっと高まってきたことを示すものであろう。このように、話しことばについてのしつけへの関心が高まってきたということは、言語生活の中で、話しことばになっていく重要度が、それだけ増してきたことを示すものと思われる。封建制度が次第に確立していったこの時代においては、特に武家階級の人々に、それがはっきり見られるというわけである。